

日蓮大聖人御書全集

しほさつぞうりゅうしょう

四菩薩造立抄

新版

1338

ʃ

1341

しほさつぞうりゅうしょう

# 四菩薩造立抄

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

ときじょうにん

弘安 2 年 ('79) 5 月 17 日

58 歳

富木 常忍

しろこそでひと うすずみ そ ころもひと おな いろ け さ いちじょう  
白小袖一つ、薄墨の染め衣一つ、同じき色の袈裟一帖、

がもくいっかんもん た そうろう いま はじ おんこいりさし ことば  
鵝目一貫文、給び候。今に始めざる御志、言をもつ

て宣べがたし。いずれの日を期してか対面を遂げ、心中の  
朦朧を申し披かんや。

いち ごじょう い ほんもんぐじょう きょうしゅしゃくそん つく たてまつ  
一、御状に云わく『本門久成の教主釈尊を造り奉り、

きょうじ くじょう じゅ しほさつ ぞうりゅう たてまつ  
脇士には久成の地涌の四菩薩を造立し奉るべし』と兼ね

ちようもんつかまつ そうちら ちようもん  
て聴聞仕り候いき。しかれば、聴聞のごとくんば、い

ずれの時ときか」云々。

うんぬん

うんぬん

そ ほとけ よ さ

たま

にせんよねん

な

夫れ、仏世を去らせ給いて二千余年に成りぬ。その間、

がっし かんど にほんこく いちえんぶだい うち ぶっぽう るふ

月氏・漢土・日本国・一閻浮提の内に仏法の流布すること、

そう とうま ほう ちくい

僧は稻麻のごとく、法は竹葦のごとし。しかるに、いまだ

ほんもん きょうしゅしゃくそん

ほんげ

ぼさつ

つく

たてまつ

てら

本門の教主釈尊ならびに本化の菩薩を造り奉りたる寺

いっしょ な さんちょう あいだ

ほんげ

ぼさつ

つく

たてまつ

てら

は一処も無し。三朝の間にいまだ聞かず。日本国に数万の

てらでら こんにゆう ひとびと

ほんもん

きょうしゅ

き

にほんこく

すうまん

寺々を建立せし人々も、本門の教主・脇士を造るべきこと

し じょうぐうたいし

ぶっぽうさいしょ

てら

ごう

してんのうじ

きょうじ

とを知らず。上宮太子、仏法最初の寺と号して四天王寺を

ぞうりゅう

あみだぶつ

ほんぞん

造立せしかども、阿弥陀仏を本尊として、脇士には觀音

かんのん

とう してんのう つく そ でんぎようだいし えんりやくじ た たも  
等・四天王を造り副えたり。伝教大師、延暦寺を立て給う  
ちゅうどう とうほう がおう そうみよう つく くじょう  
に、中堂には東方の鵼王の相貌を造つて本尊として、久成  
きょうしゅ きょうじ こんりゆう たま なんきょうしちだいじ なか  
の教主・脇士をば建立し給わず。南京七大寺の中にも、  
ほんぞん  
このことをいまだ聞かず。田舎の寺々もつてしかなり。  
いなか てらでら  
かたがた不審なりしあいだ、法華経の文を拝見し奉り  
ふしん ほけきょう もん はいけん たてまつ  
しかば、その旨顯然なり。末法・鬪諍堅固の時にいたらず  
むねけんねん まっぽう とうじょうけんご とき 至  
んば造るべからざる旨分明なり。正像に出世せし論師・  
にんし つく ほとけ いまし おも ゆえ ろんじ  
人師の造らざりしは、仏の禁めを重んずる故なり。もし  
しようほう ぞうほう なか くじょう きょうしゅしゃくそん  
正法・像法の中に久成の教主釈尊ならびに脇士を造るな  
きょうじ つく

らば、夜中に日輪出で、日中に月輪の出でたるがごとくな  
るべし。末法に入つて始めの五百年に上行菩薩の出でさ  
せ給いて造り給うべき故に、正法・像法の四依の論師・人師  
は言にも出ださせ給わず。竜樹・天親こそ知らせ給いた  
りしかども、口より外へ出ださせ給わず。天台智者大師も知  
らせ給いたりしかども、迹化の菩薩の一分なれば、一端は仰  
せ出ださせ給いたりしかども、その実義をば宣べ出ださせ  
給わず。ただ、ねざめの枕に時鳥の一音を聞きしがごと  
くにして、夢のさめて止みぬるよう弘め給い候いぬ。そ

いげ　にんし　いちごん　おお　い　たも  
れより已外の人師は、まして一言をも仰せ出だし給うこと  
なし。これらの論師・人師は、靈山にして、「迹化の衆は、  
末法に入らざらんに、正像一千年の論師・人師は本門久成  
の教主釈尊ならびに久成の脇士・地涌上行等の四菩薩  
を影ほども申し出だすべからず」と御禁めありし故ぞかし。  
今、末法に入れば、もつとも仏の金言のごときんば造る  
べき時なれば、本仏・本脇士造り奉るべき時なり。当時は  
その時に相当たれば、地涌の菩薩やがて出でさせ給わんず  
らん。まずそれほどに四菩薩を建立し奉るべし、もつと

いま

とき

うんぬん

てんだいだいし

のち

も今はしかるべき時なりと云々。されば、天台大師は「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」としたい、伝教大師は「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり」と恋いさせ給う。日蓮は、世間に日本第一の貧しき者なれども、仏法をもつて論ずれば一闇浮提第一の富める者なり。これ、時のしからしむる故なりと思えば、喜び身にあまり、感涙押さえ難く、教主釈尊の御恩報じ奉り難し。恐らくは、付法藏の人々も、日蓮には果報は劣らせ給いたり。天台智者大師・伝教大師等も及

び給うべからず。最も四菩薩を建立すべき時なり云々。  
たも もつと しほさつ こんりゆう とき うんぬん

問うて云わく、「四菩薩を造立すべき証文これ有りや。」  
と い こた し し しよ あ

答えて云わく、「四菩薩を造立すべき証文これ有りや。  
な い こた ゆじゅっぽん い し いち じょうぎょう  
と名づけ、二に無辺行と名づけ、三に淨行と名づけ、四に  
あんりゆうぎょう な さん じょうぎょう な  
安立行と名づく」等云々。  
と い のち ごひやくさい かぎ きようもん あ

問うて云わく、「後の五百歳に限るといえる経文これ有り  
や。」  
こた い やくおうほん い われめつど のち のち  
答えて云わく、「我滅度して後、後の  
ごひやくさい うち えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ

五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることな  
ごひやくさい うち えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ

かれ」等云々。

一、御状に云わく「大田方の人々、一向に迹門に得道あるべからずと申され候由、その聞こえ候」。

これはもつての外の謬りなり。御意得候え。本迹二門

の浅深・勝劣・与奪・傍正は、時と機とに依るべし。一代

聖教を弘むべき時に三つあり。機、もつてしかなり。仏

の滅後、正法の始めの五百年は一向小乗、後の五百年は  
權大乘、像法一千年は法華經の迹門等なり。末法の始め

には一向に本門なり。一向に本門の時なればとて、迹門を

す

ほけきよういちぶ

さき

じゅうしほん

す

捨つべきにあらず。法華經一部において前の十四品を捨て

きょうもん

な

ほんじやく

しょはん

いちだいしようぎょう

さんじゅう

べき經文これ無し。本迹の所判は、一代聖教を三重に

はいとう

とき

にぜん

しゃくもん

しょうほう

ぞうほう

まつぼう

ほんもん

ほんもん

ほうもん

配当する時、爾前・迹門は正法・像法、あるいは末法は本門

ひろ

たも

とき

いま

とき

しょう

ほんもん

ほんもん

ぼう

の弘まらせ給うべき時なり。今の時は正には本門、傍には

しゃくもん

迹門なり。

しゃくもんむとくどう

い

しゃくもん

す

いつこうほんもん

こころ

い

迹門無得道と云つて迹門を捨てて一向本門に心を入れ

たも

ひとびと

ほ

い

ほうもん

なら

たま

れさせ給う人々は、いまだ日蓮が本意の法門を習わせ給わ

ほか

びやつけん

わたくし

ほうもん

ざるにこそ。もつての外の僻見なり。私ならざる法門を

びやくあん

ひと

てんまはじゅん

み

い

か

僻案せん人は、ひとえに天魔波旬のその身に入り替わつて、

ひと

じしん

むけんだいじょう

お

そそうろう

拙

人をして自身ともに無間大城に墮つべきにて候。つたなし、つたなし。

この法門は、年来貴辺に申し含めたるよう人々にも披漏あるべきものなり。

総じて、日蓮が弟子と云つて法華経を修行せん人々は、  
日蓮がごとくにし候え。さだにも候わば、釈迦・多宝・十方  
の分身・十羅刹も御守り候べし。それさえなお、人々の  
御心中は量りがたし。

一、日行房死去のこと、不便に候。これにて法華経の

文読み進らせて、南無妙法蓮華經と唱え進らせ、「願わくは  
にちぎょう しゃか たほう じっぽう しょぶつ りょうぜん むか と たま  
日行を、釈迦・多宝・十方の諸仏、靈山へ迎え取らせ給え」  
もう あ そちら  
と申し上げ候いぬ。

身の所労いまだきらきらしからず候あいだ、省略せ  
しめ候。またまた申すべく候。恐々謹言。  
もう そうちれん しおりやく  
こうあんにねんごがつじゅうしちにち きょうきょうきょうきんげん  
そうちれん かおう

弘安二年五月十七日

日蓮 花押

ときどのごへんじ

富木殿御返事